

第11回・創立40周年記念 九州橋梁・構造工学研究会シンポジウム

## 特別講演

# 「社会と構造工学のこれまでとこれから ～橋梁を中心に～」

講師 元日本大学教授 五十畑 弘 氏

[全国土木施工管理技士会連合会 CPDS 認定プログラム (853986/1 unit) ]

主催 九州橋梁・構造工学研究会 (K A B S E)  
日時 2023年12月2日(土) 11:20 - 12:20 (シンポジウム: 9:50 - 18:00)  
会場 長崎大学・文教スカイホール (文教キャンパス、グローバル教育・学生支援棟4階)

### 講演概要

「橋梁・構造工学について、橋梁分野を中心として過去半世紀の経過を振り返りながら、講演者のこれまでの経験なども踏まえて、構造技術のこれからの方向性を考える。」

#### Point 1: 構造工学の「これまで」から見えること橋梁建設の量的拡大と長大橋時代

KABSE が設立された今から40年前当時の橋梁・構造分野の状況は、まさに「橋梁建設の量的拡大と長大橋時代」の真っただ中であった。戦後の構造分野は、関東大震災復興を到達点とする戦前の発展が下敷きとなり、戦後の高度経済成長期を経て、量的拡大と長大橋の時代を迎える。

#### Point 2: 「これまで」から読み取れる構造分野の特徴と傾向

一方、目覚ましい出来事ではないマイナーな技術実績でも、発展過程の不連続、変換点、あるいは欧米との相違点などの視点から「これまで」を見ることで日本の構造分野の特徴、傾向を読み取ることができ、「これから」を考えるヒントとなる。

#### Point 3: 構造工学の「これから」を考える

近年、橋梁構造では、日本の橋梁史上かつてないほどの新設橋の構造形式が減少しているが、構造形式の多様化を図ることは喫緊の課題である。また、仕様設計のみではなく、性能設計の取り入れを増やす設計、検討手法、解析法などの多様性を図ることも必要である。景観性、歴史・文化など、橋梁構造に対して安全、耐久性などの基本的な要求性能以外を求めることも増えており、要求性能の多様性には、これからの構造工学を考えるヒントが含まれる。

### 【講師】



#### 五十畑 弘 (いそはた ひろし)

1947年東京生まれ。1971年日本大学生産工学部土木工学科卒業。博士(工学)、技術士、土木学会特別上級技術者、日本鋼管(株)で橋梁、鋼構造物の設計・開発に従事。JFEエンジニアリング(株)主席を経て、2004年から2018年まで日本大学生産工学部教授。2019年から道路文化研究所特別顧問。『図解入門よくわかる最新「橋」の科学と技術』(秀和システム)など著書多数。

■ 会場案内図

○ 長崎大学・文教スカイホール（文教キャンパス、グローバル教育・学生支援棟4階）

